

カンボジア通信

カンボジア教育支援基金 (KEAF-Japan) 会報

2019年9月 92号



〒162-8433 東京都新宿区市谷本村町10-5
JICA地球ひろば気付

カンボジア教育支援基金事務局

info@keaf-japan.com
http://keaf-japan.com

僻地の学校では離村農家が急増

家族一緒に出稼ぎへ

教員志望が増える傾向に

池内 秀樹

事務局の岡宮、池内の2人が6月30日から7月8日までの日程で、ベトナム国境に近いカンボジア南東部プレイヴェン、スヴァイリエン両州の農村地帯に点在する4高校、8中学校、4小学校、1養護施設を訪問してきました。

11月からの新学期(2019.11-20.10)に備え、間もなく中学を終えて高校1年生(小中校から通して10年生と呼ぶ)となる50人(9年生)の面接と、2、3年生となる98人の奨学生とその後の勉強ぶりを知るための面接が主な目的でした。

首都との格差が引き金

1年ぶりの首都プノンペンの建設ラッシュは相変わらずで、高層ビルがさらにあちこちに出現し、中国などの外国資本の新たな商業施設もオープンして活況を呈していました。その分、一歩農村地帯に足を踏み入れると、格差のひずみは一層、進行し広がりつつあって、一部地域では深刻な状況が表面化していることがわかりました。

各校で同じ質問をして生徒の家庭環境などを見ます。例えば、幹線道路(ベトナムへとつながる国道1号線)沿いの高校の生徒たちのなかにはスマートフォンを持つ生徒がぼつぼつ増えてきていて、スマホを使って調べものをするという生徒が出てくる一方、幹線道路からはずれて昔ながらの田舎道に入った学

校では、スマートフォンどころか、普通の携帯電話も持てず、テレビとも無縁の生徒がまだまだかなり多い、というのが現状です。

しかもベトナム国境沿いの辺鄙なところにある学校周辺では、農民の離村が増えており、プレイトープ中学校のワン・バーン・ソック校長は「ことしの3年生79人のうち半数が高校進学のための国家試験への受験申請をしていないため、高校に進学できない。事情を調べると、高校どころか家族ともども離村



(写真: 午後の補習授業を受ける前に校庭のベンチでおしゃべりを楽しむプレイトープ中生徒)

.....

して出稼ぎに出るというケースが大半だとわかりました。かなり深刻な事態です。来年はさらにこの状態が悪化するのでは」と頭を抱えていました。

土地を所有していても、離村のさいにベトナム人に賃貸していく例がほとんどという。その土地も将来的には手放さざるを得ないのではと危惧されていました。近くバンティチャクライ中学校でも、ことしは10人が家族とともに離村する予定だと聞きました。

「学校生活は楽しい」

残念—退学が7人

奨学金支給対象の4校では、せっかく高校に進学したのに、退学者が今年も7人も出ていました。昨年までの調査では、その理由は、男子も女子も首都、あるいはタイなどへの出稼ぎ労働者となっていくというのが圧倒的に多く、次いで女子生徒の場合は結婚というものでした。

ことしも、どうやら出稼ぎが多いと思われるのですが、念のため、学校側にあらためて退学の理由を個別に調べてもらうよう依頼しました。

家計支える出稼ぎ

今回の面接でも、生徒の兄、姉がプノンペン縫製工場に働いている、と明かす奨学生が10人近くいました。家の生計はこれらの若い働き手が担っているのです。

ですが、カンボジアの縫製業界は今、輸出先のEU（欧州連合）との間で関税問題を抱え、先行きへの不安が出てきているようです。

この問題の展開によっては、貧しい農村の青年たちにとって縫製工場は頼みの就職先であることから、他人ごとではなくなる恐れも出てきていると地元紙は伝えていました。

地元回帰の動きも

将来は何をしたいのか、と尋ねてみると、この4、5年は銀行員との答えがかなり多かったのですが、ことしはそれが激減し、中学か高校の教員という答えが増えていました。

制服を着て冷房の効いた銀行オフィスでの生活へのあこがれから転じて、地元の学校の先生になりたいという希望者が増えてきたのは、地元回帰への傾向が出てきたとも受け取れます。

KEAFは教員養成所に入りたい高卒者の支援に力を入れてきましたが、その傾向をあらためて確認できたように思います。

また、養豚、養鶏、農作物の生産のため、ファームを経営したいという女子生徒もいま



(写真：ソンボン小学校の図書室で各クラスの子どもたちが交代で絵本などに見入っていた。まだまだ絵本の数は少ない)。

・・・・・・・・・・・・・・・・

した。過去12年間、そういう希望を述べる生徒がひとりもいなかったことを考えると、新しい考え方が出てきたようにも思われます。

「いろんなこと学べる」

面接を一通り終えて、奨学金を受け取って2年目、3年目となる11、12年生たちとの雑談に移ると、いずれも「いろいろ学ぶことができて学校生活が楽しい」と言っていました。

この子たちが家庭の経済的事情から、首都や場合によってはタイなど外国への出稼ぎに出なくてもすむようにと願うばかりでした。

鉛筆削り器—これ何？

プレイヴェン州の州都プレイヴェン市にあるフランス系の養護施設「アスペカ」を訪れ、使いかけの鉛筆や消しゴムなどの文房具や紙風船、けん玉のような幼児のおもちゃを届ける活動も続けています。

ことしも、会員有志から寄贈を受けた文房具や布製のバッグなどを届けました。その中に使用済みの鉛筆



削り器が一つありました（右上の写真）。

施設の人々は「これはなんですか。見たことがない」といいます。われわれは一瞬、驚き、「これは鉛筆削り器です」と、使いかけ鉛筆を尖らせる“実演”をして見せると、嘆声を発し、喜んでいました。寄贈してくれた会員の方、本当にありがとう。

《カンボジア昨今・その1》

アプリ搭載「白タク」がブーム 追いやられる「トゥクトゥク」

大阪でスマホのアプリを利用したタクシーサービスが始まって話題となっているが、プノンペンではいち早く昨年後半からこのサービスが開始され、ブームとなっていた。

カンボジアでは、トゥクトゥクという軽便な3輪車タクシーが庶民の足として使われているが、最近、このトゥクトゥクは白一色（一部は黄色）のきれいな姿となって町中を走り回っている。

写真の左が黄色トゥクトゥク・タクシー。右が旧型のトゥクトゥク（クメール・タイムズ紙から）。

しかも、このタクシー、スマホを使った配車サービスのアプリを運転台の正面に搭載していて、お客はこのアプリを使って乗りたい場所を指定すると、近くを走行中のトゥクトゥクがあまり時間をおかずに飛んでくる、という便利さが売り物なのだ。

メーター制で安心・安価

料金は交渉の必要がないメーター制で、しかも1キロあたり最低運賃が0.3ドルと安い。そのため、3輪車の荷台を客席に改造したり、客席に改造した荷台をオートバイに取り付けたりしただけの既存の伝統的トゥクトゥクはプノンペンの街角から急速に姿を消し始めている。

インドメーカーが売り込み

主として白一色のこの新型トゥクトゥク、インドのムンバイを拠点とする大手自動車

メーカー、タタ・モーターズ社製だ。新車で購入すると、昨年は2,000ドルぐらいだったのが、今では3,500ドル以上もする。

このタタ社とシンガポールの配車アプリを開発した「パスアップ」(Pass App)社が提携し、トゥクトゥクと配車アプリをセットで販売、資金力のない運転手にはローンを組ませ、タクシー業の売り上げの一部を返済に充てさせるという仕組みである。

地方都市にも進出

正確な台数は不明だが、プノンペン市内には3万台、あるいは5万台になったとも



言われる。

シエムレアップ、コンボンソムなど地方都市にも浸透し始めているほか、大阪同様に別の配車アプリも進出してきて、競争は激しくなっている。

KEAFの活動拠点であるプレイヴェン州のメコン川沿いの町、ネッルーンでもこのトゥクトゥクを見かけるようになった。その運転手に聞くと「4,500ドルで、ローンを組まずに現金をはたいて買った」と誇らしげだった。

白タクといえば、日本では白ナンバーの自家用車を使って無許可でタクシー営業をする違法タクシーの代名詞だが、カンボジアでは新型トゥクトゥクのこぎれいな「白タク」のことだ。（池内秀樹記）

ありがとうございました (2019年6月1日～8月15日)

年会費、寄付金、奨学金を振り込みくださった方々に厚くお礼を申し上げます(敬称略させていただきます)

(神奈川) (東京) (神奈川) (東京) (東京) (東京)
(埼玉) (神奈川) (埼玉) (群馬) (東京) (千葉)
(東京) (東京) (神奈川) (東京) (東京) (大阪)
(東京) (東京) (神奈川) (千葉) (埼玉) (東京)
(神奈川) (大阪) (富山) (大阪) (神奈川)
(熊本) (東京) (神奈川) (福岡) (東京) (東京)
(東京) (埼玉) (東京) (東京) (大阪)
(長野) ※お名前は個人情報なので伏せて掲載しています。※奨学生紹介の4～7頁は個人情報保護のため省略

《カンボジア昨今・その2》

アンコールワットを守ろう

「歴史遺産の守護神」は元日本留学生

カンボジア最大の歴史遺産、アンコールワット遺跡群を訪れる観光客は2018年には550万人。2000年代に入って長い内戦の混乱が落ち着いたころの50万人から11倍増になった。それだけに観光客が残す膨大なゴミの処理や、遺跡に上って裸写真を撮る若者が出るなど大小さまざまな破壊行為から遺跡を守ることが地元の大きな仕事になっている(写真: アンコールトムを訪れる観光客)。

アンコール遺跡群の修復・保存を長年指導してきた石沢



良昭上智大教授・元学長は並行して、こうした状況に備えた「アンコール環境教育プロジェクト」を2003年に立ち上げた。

「カンボジア

の歴史遺産を守るのはカンボジア人の責任」というのが石沢さんの考えだった。このプロジェクトのリーダーになったのがラオ・キム・リアンさん(61)。

リアンさんは国費留学生として東京工大で学び、日本品質保証機構(JQA)に長年勤務、定年退職のあとアンコールワットの町、シエムリアップに住みこんだ。「遺跡を汚しているのは外国人」という地元住民を「歴史遺産を守るのは我々」と説得、小中高校の教室に出かけたり、時には生徒たちをゴミ拾いに連れ出したりと、今もアンコールワットの「守護神」の毎日を送っている(東京新聞2019・7・30「増える観光客、文化遺産を守れ」共同通信配信記事から)。

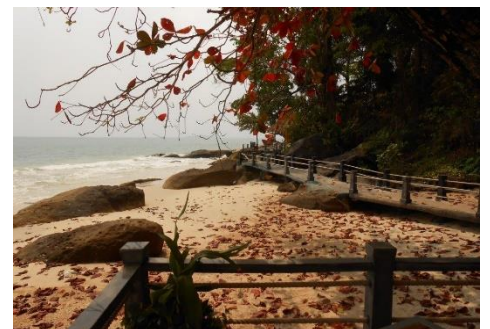
「一带一路」―乱開発と破壊

どうなるシアヌークビル・ビーチ

カンボジア南部のタイ湾に面するシアヌークビル。南シナ海に突き出るメコンデルタをベトナムに蚕食されたカンボジアにとっては、大型船が出入りできる港のある唯一の海へ出入り口。静かな青い海と白砂が美しい。王家一族やフランス植民地当局者たちのリゾート地だった。

戦争中はプノンペン政権にとって戦争物資を含めて主要な補給基地だったので、プノンペンと結ぶ国道4号線は反政府ゲリラ(クメール・ルージュ)の攻撃目標になった。そのシアヌークビルがいま、中国資本によって「一带一路」の東南アジアにおける要衝都市へと変貌しつつある。

6月には中国企業が当局に無許



可で建設中の7階建てビルが崩壊、ビル内で寝起きしていたカンボジア人作業員50人以上が巻き込まれて、半分の28人が死亡した。ほとんどが出稼ぎにきた貧しい農民だった。

ホテル156軒が立ち並び、そのうち150軒が中国人経営。カジノも62軒あって48軒が中国人経営だ。地元経済の90%は中国人がすでに支配、さらに中国企業の建設事業が150件進行中という(2019・7・28東京新聞現地ルポから)。

あのビーチはどうなるのだろう。いくつかの大ホテルの「プライベート・ビーチ」になるのが運命だろう。カンボジアは新しい植民地時代に入りつつあるのかな?(写真: シアヌークビルのビーチ。2014年撮影) 一金子記